

2025年1月1日（水）「偽りなき唇の祈り」

詩編 17 編

《偽りなき唇の祈り》

- 1 祈り。ダビデの詩。主よ、私の正しさをお聞きください。叫びに心を向けてください。耳を傾けてください、偽りのない唇から出る私の祈りに。
- 2 御前から私のために判決が出され、あなたの目が公平に注がれますように。
- 3 あなたは私の心に試練を与え、夜、訪れて私を試みましたが、何も見いだすことはありませんでした。たくらみなど口にすることはありません。
- 4 人のなすべきことについては、あなたの唇の言葉に従い、私は無法者の振る舞いを見張ってきました。
- 5 私の歩みはあなたの道を守り、足取りの揺らぐことはありません。

《詩人を取り囲む者と守る方》

- 6 神よ、私はあなたに呼びかけます。あなたが私に答えてくださるからです。私に耳を傾け、この訴えを聞いてください。
- 7 あなたの慈しみの業を現してください。攻め来る者から逃れる者を、右の手をもって救われる方。
- 8 瞳のように私を守り、あなたの翼の陰に隠してください、
- 9 私を虐げる悪しき者から、私を貪欲に取り囲む敵から。
- 10 彼らは脂肪で覆われ、その口で高慢に語ります。
- 11 私を追い詰めるや、取り囲み、地に打ち倒そうと目を向けています。
- 12 餌食を引き裂こうとする獅子、物陰に潜む若獅子のように。

《救いを求める祈り》

- 13 主よ、立ち上がってください。彼に立ち向かい、屈服させてください。あなたの剣によって、悪しき者から、私の魂を救い出してください、
- 14 主よ、人々から、あなたの手で。人々から、彼らの人生の分け前であるこの世から。あなたがかくまった人に、十分な食べ物を与えてください。子どもたちも満ち足り、その幼子たちにも豊かな富を残せますように。
- 15 私は義にあって御顔を仰ぎ見、目覚めてあなたの姿に満ち足りるでしょう。

【序論】

新年あけましておめでとうございます。2025年という新しい年が明けましたが、その第一日を元旦礼拝で飾れることを感謝いたします。年明けには詩編から語らせていただくのを通例とさせていただいており、詩編第1編から始めて今年は第17編に至りました。

一年を歩む中で、私たちは人間関係における様々な課題に直面します。人との関わりの中で生きている以上、避けて通れない道です。しかし、その道においてどのように振る舞うかが重要であります。キリスト者は神と人に対して偽りのない姿勢を選び取りたい。神は心の直ぐな人と共にあり、凸凹に入り組んだ道も平らに整えることがおできになります。今日の詩編から、詩人が神の御前にどう歩んでいたか、どのように祈ったか、そして神が彼にどうお応えになったかを学び取ることができるでしょう。

【本論】

本論1. 偽りなき唇の祈り

本編の作者は「**ダビデ**」とされていますが、もしそうであるなら、彼が不当な攻撃に遭っている状況下で祈った祈りが想定されます。思い浮かべやすいのは、彼がサウル王の家臣であったとき王の妬みによって命を狙われていた暗黒の時期です。ダビデはサウルに忠実に仕えてきましたが、彼の人気が高まるとサウルは不安になり、ダビデが謀反を起こして王位を奪うのではないかと疑心暗鬼になりました。サウルは執拗にダビデを追い続けます。逃げても逃げても追っ手が迫ってくる。ダビデがここにいるという噂が王の耳に届くと、偵察隊が送られて王に報告される。その地域の人々にダビデを包囲するよう命令が下される。ダビデはまた逃げる。そんなイタチごっこが行なわれていました。この箇所は、マオンの荒野にダビデが逃げ込んでいたときのことでないかと言われています。

「**ダビデの足跡があるというその場所をもう一度見に行き、確認するのだ。誰か目撃者があれば、私に知らせてほしい。彼は非常に用心深い。ダビデが隠れた場所をつぶさに調べて、確かな手がかりを持って来てくれれば、あなたがたと共に出て行こう。もし彼がその地にいるなら、ユダのすべての氏族の中から捜し出してみせる。」**そこでジフの人々は立って、サウルに先立ってジフに戻って行った。一方、ダビデとその部下の者たちは砂漠の南方、アラバのマオンの荒れ野にいた。サウルと配下の者はダビデを狙ってやって来たが、その知らせがダビデに届くと、彼はマオンの荒れ野の岩場に行き、そこにとどまった。サウルはこれを聞き、**ダビデを追ってマオンの荒れ野に向かった。**（サムエル上 23:22-25）

岩場に隠れて祈るダビデの姿をイメージすると、本編の内容が痛く心に沁みてこないでしょうか。

主よ、私の正しさをお聞きください。叫びに心を向けてください。耳を傾けてください、偽りのない唇から出る私の祈りに。（17:1）

彼は神の御前に自分が罪のない存在だと言っているわけではありません。サウル王に追われるようなことは何もしていないと訴えているのです。「私の正しさ」「偽りのない唇」ということ自体に驚かされます。人の言葉には偽りが紛れ込んでいることが多いからです。しかし、ダビデは神に対して偽らざる真実を語っていることを誓います。

御前から私のために判決が出され、あなたの目が公平に注がれますように。(17:2)

彼は判決を主に求めています。人々は王の権力を恐れ、ダビデの正しさを知っていたとしても王に与^{くみ}する者が多かったのでしょう。ダビデを擁護すると命が危うかったからです。最終的に頼れる存在は神のみ。神の御前に正しく歩んでいるということ、言葉と行動が一致していることが、神の答えを得る上で重要なあり方でした。

あなたは私の心に試練を与え、夜、訪れて私を試みましたが、何も見いだすことはありませんでした。たくらみなど口にすることはありません。人のなすべきことについては、あなたの唇の言葉に従い、私は無法者の振る舞いを見張ってきました。私の歩みはあなたの道を守り、足取りの揺らぐことはありません。(17:3-5)

神はダビデの心が真実であるかどうかを試されました。神との関係が健全であるかどうか、不法な道を歩んではいけないか。もし神に対して後ろめたい思いがあるなら、力ある祈りは出てきません。クリアな関係の中でこそ、自分を擁護してくださるよう神に祈ることができるのです。

人間関係において何か問題が生じたとき、まず自分の内に非がないかどうかを問うようにしましょう。また、相手の言動がどういう動機から出ているのかを考え理解することも重要です。その上で神に問題の解決の道を求める。自分が言葉と行動において罪を犯さないということが、神からのまっすぐな答えを得るための最短の道です。

本論 2. 詩人を取り囲む者と守る方

6～12 節では、詩人を守り給う神と彼を苦しめる者の両方について語られています。まずは、後者が詩人にとってどういう存在であったかを見てみましょう。

① 敵対者

敵対者について「攻め来る者」「私を虐げる悪しき者」「私を貪欲に取り囲む敵」などと言われています。これだけでは具体的な状況は分かりませんが、詩人の敵は一人ではなく集団で包囲網を固めていたことが窺えます。剣でもって命を狙われることはもちろんのこと、根も葉もない噂を立てられ多くの人がそれを信じ込む状況はより厄介です。自分の潔白を証明する機会が持てないまま、噂だけが一人歩きしていくことが少なくありません。多くの言葉が飛び交う中から「事実」だけを掴み取らなくてはならない。詩人の時代にも、彼が謀反を企んでいるとか、誰かと手を結んだとか、王の悪口を言っていたとか、あるいは神を冒瀆したという噂を立てられた可能性もあります。事実でないことが拡散され民衆の意識に刷り

込まれると、彼を追い詰めることが善であるという大衆意識が高まっていきます。詩人の苦しみはそういうところにあったのではないかと想像します。

「**彼らは脂肪で覆われ**」という 10 節の表現は、敵対者たちの心が鈍くなっていることを表しています。彼らの霊の目は正しいことが何であるかが見えなくなっており、偽りを見抜くことができない。詩人と神のまっすぐな関係には目を閉ざし、間違っていると分かっているにもかかわらず、自分の社会的立場を守ることを最優先事項とする。

②詩人にとっての神

そのような状況下にあつて、詩人が依り頼むところは人ではなく神でした。詩人が神をどのような方と見ていたかが、ここではよく表されています。そして、彼の信仰の姿勢を見るとき、私たちの生き方が改めさせられるでしょう。

(1) 呼びかけに答え、訴えに耳を傾けてくださる方（6 節）

詩人は自分の祈りが確かに聞かれていることを信じていました。また、神はその祈りに答えてくださる方であると確信していました。根拠なく盲信していたのではなく、過去の経験から繰り返し学んできたことなのです。

私たちはどうでしょう。自分の祈りは本当に聞かれているのだろうか、祈っても神は何もしてくださらないのでないか、そのような疑いをもって祈っていたら、そこに答えはないでしょう。神の心を動かすには、神とまっすぐに向き合う必要があるのです。

(2) 慈しみの業を現し、右の手をもって救われる方（7 節）

「慈しみ」は原語で「חֶסֶד」（ヘセド）。基本的な意味は「善」「親切」「忠実」ですが、「契約を一方的に守る」という意味が含まれています。詩人もまた一人の人間であり、罪・過ちを犯す存在でした。しかし、彼は神に対して自分の過ちを隠すことなく、風通しの良い関係の中で罪を告白し、常に赦しを得ていたのです。そのような関係性の中でこそ、神は彼を苦境から救い出してくださるのでした。「右の手」は力強さを表す表現であり、逆境をひっくり返すことのできる神の全能性を示しています。

(3) 瞳のように守り、翼の陰に隠してくださる方（8 節）

「瞳のように守る」という表現は、旧約聖書の中に何度か出てきます（申命 32:10、箴言 7:2、ゼカリヤ 2:8）。瞳とは、目の中にある最も注意深く守らなくてはならない器官です。人は視力を失うと、従来できていたことの多くができなくなってしまいます。私は時々ディスクグラインダーを使って金属の切断をすることがありますが、その作業中特に気をつけなくてはならないのは、火花と鉄粉です。ナイロンの服は引火しやすいので避ける必要があります、とりわけ目が鉄粉でやられないようにゴーグルの着用を怠ってはなりません。ここでは、そのように危険から自分の身を守るかのように、神が詩人を守っ

ておられることが表現されています。また、「翼の陰に隠す」とも言われているように、母鳥が雛を守るごとく神が詩人をかくまっておられる様子を描いてもいます。

本論 3. 救いを求める祈り

最後に、より具体的な「救いを求める祈り」へと進みます。14 節の内容はいくぶん複雑で、写本の破損によって翻訳上の混乱が生じたものと思われます。聖書協会共同訳と新改訳 2017 を比較してみましょう。

〔聖書協会共同訳〕

主よ、人々から、あなたの手で。人々から、彼らの人生の分け前であるこの世から。あなたがかくまった人に、十分な食べ物を与えてください。子どもたちも満ち足り、その幼子たちにも豊かな富を残せますように。

〔新改訳 2017〕

主よ、御手をもって人々から、相続分が地上のいのちであるこの世の人々から、私のたましいを助け出してください。あなたの蓄えで彼らの腹は満たされ、子たちは満ち足り、その余りをさらにその幼子らに残します。

共通しているのは、詩人の敵が相続するものが「この世」のものであるということ。この世的には良い待遇を受けても、神との関係においては何も持っていないということが言いたいのでしょう。彼らには神との契約関係がない。永遠に残るものが何もない¹。

詩人が辿り着いたところは、「私は義にあつて御顔を仰ぎ見、目覚めてあなたの姿に満ち足りるでしょう」（15 節）という全き平安でした。彼は敵からの攻撃の最中であつたかもしれませんが、彼の内には、神が必ず自分の人生を守り導いてくださるという確信がありました。

¹ 本節後半の解釈は大きく違っています。聖書協会共同訳では、詩人の子孫が神からの豊かな富を受け取るべきことが願われています。一方、新改訳では、敵の子孫が神からの富を受け継いでいるような状況が描かれています。実際の世を見ると、特権階級の人々が富を独占しているという現実があります。これは今に始まったことではないでしょう。多くの富を保有していることが「神の祝福」であり「神からの相続分」であるとするなら、貧しい人は祝福を受けていないことになってしまいます。しかし、そうではありません。「神からの相続分」とは、本質的には物質的なことではなく、神の国に属する生き方であり、信仰であるからです。どんな境遇にあつたとしても神の守りと支えにあずかることができる人々がいます。富に頼らず、与えられているものを喜び、知恵をもってそれを増し加えることを知っている人がいます。この知恵こそ、「神からの相続分」と言えるのかもかもしれません。

【結論】

2025 年が始まりましたが、私たちもまだ見ぬ未来へ向けて歩み出すとき、今日の詩人のように神に信頼を置くものでありたい。神と自分の関係において、常に正直であること、偽りを語ることなく、罪・過ちもそのまま告白すること。そのような透明な関係性の中に、神の最善の導きと祈りへの答えが与えられていくのです。自分に敵対する者がいたとしても、神と人に対してまっすぐな生き方、誠実な道を示し続けていくことができる。そのように生きていくとき、主はすべての凸凹道を平らにしてくださるでしょう。

愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐は私のすること、私が報復する』と主は言われる」と書いてあります。(ローマ 12:19)

【祈り】

歴史を導き給う、天の父なる神様。人の一生は、歴史のほんの一頁に過ぎず、風のように過ぎ去ります。しかし、限られた日数をどう生きるかは一人ひとりに問われています。私たちは神と共に歩みたく、神と人に対して偽りなき生き方ができるようにと願っています。2025年が始まりましたが、その365日を主に喜ばれる生き方ができるよう導いてください。私たちの祈りに応えてくださり、それに先立って常にあなたとのまっすぐな関係を構築させてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
すべてにおいて真実であり、人にまっすぐな道を求め給う、父なる神の愛、
人の生きるべき「道」「真理」「いのち」であり給う、主イエス・キリストの恵み、
言葉と行動において常に一貫した生き方へと導き給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。